

## トルコの子ども達のコミュニケーション生活

横山, 東  
九州女子大学文学部

横山, 正幸  
九州女子大学文学部

<https://doi.org/10.15017/9037>

---

出版情報 : 生活体験学習研究. 3, pp.93-98, 2003-03-01. 日本生活体験学習学会  
バージョン :  
権利関係 :

# トルコの子ども達のコミュニケーション生活

横山 東・横山 正幸

## Turkish Children's Communicative Life

Yokoyama Azuma・Yokoyama Masayuki

### 1. はじめに

#### (1) 子どもの発達とコミュニケーション

人とものおじせず、きちんと話ができる、すなわち言葉によるコミュニケーションができるということは、子どもの健全な発達にとって、また学校生活を含む日々の生活を心豊かに過ごすためにも非常に大切なことである。それはコミュニケーションには、次のような意義があるからである。

#### ① 人間関係が豊かになり、深まる

好意をもっていても声をかけることなく友達になることができるだろうか。一緒に遊びたいと思っても声をかけなくては何も変わらない。人間関係は声をかけ合うことによって始まり、話すことによって相手を理解し、親密になることができるのである。さらに、人との交流を楽しむことができるのも言葉を交わしてである。

#### ② 自己主張ができる

いじめにあっても「助けて！」という言葉が発することなく、どれほどの人が手を差し伸べてくれるだろうか。話すことによって嫌なことを拒否したり、危険から身を守ることも可能になる。

#### ③ 心の緊張が解消され、精神衛生がよくなる

カウンセリングでは、臨床心理士は治療のために薬物を使うわけではない。基本的には心に苦しみをもつ相談者が語る言葉に耳を傾けてやるだけである。ただそれだけで相談者の気持ちが楽になっていくのである。

つらいこと、誰かに心のうちを話すという行為には心の緊張を解消し、精神衛生をよい状態に維持するという働きがあるのである。

#### ④ 社会生活をスムーズにする

我々は社会生活の様々な場面で、人に説明したり、報告したり、依頼したり、要求したり、指示をしたり、教えたり、質問したりしなければならないことがある。話すことができるということはこれを可能にする。

#### ⑤ 自分で考えたり、判断したり、まとめたりする能力が向上する

それは話すということは思考と不可分の関係にあるからである。例えば、質問という行動を考えてみよう。普通、考えることなしに質問することはありえない。わからない、あるいは疑問があるから質問しているのである。質問するためには考えなければならない。結果として、考える力を促すことになる。

このように考えると、コミュニケーション能力は子どもの健やかな発達にとって不可欠な「生きる力」そのものだと言えよう。コミュニケーションができるということは、子ども達の生活を楽しく、充実したものにす最も重要な条件なのである。

#### (2) 日本の子ども達のコミュニケーションの現状

子どもの話す能力は、幼児期の終わり頃までには日常生活に困らない程度に発達する。当然、小学校の3、4年生にもなったら、例えば、カレーライスを食べた後、もう一杯水が欲しくなったら「お母ちゃん、お

連絡・別刷り請求先 (Corresponding author)

九州女子大学文学部 (〒807-0867 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1)

Kyushu Women's University (1-1 Jiyugaoka Yahatanishiku Kitakyushushi, Japan)

水ちょうだい」ぐらいは言えなければいけない。ところが、今の子どもはコップを差し出し、一言「水！」としか言わない。また、阿部茂明(1990)は、全国の養護教諭を対象にアンケート調査を行い、子どものからだワースト10を引き出しているが、その中に小、中、高いずれの段階でも「症状説明できず」という言葉の問題が出てくる。実際、授業中おなかが痛くなったら「先生、さっきからおなかのここのところがとても痛いので、保健室に行ってもいいですか」などと文章できちんと言うべきである。ところが、それが言えないだけでなく、自分の症状をきちんと説明できない子が今や少なくないのである。保健室に行くと、養護の先生が「どこがどんなふうなの？」と尋ねても「おなか」と言うだけ。きちんとした文による表現ができず、何でも一語か二語ですますのである。これを「単語人間」という。

このことは決して小学生だけの問題ではない。大学生でも基本的には変わらない。例えば、東海大学の荻原公世・学生相談室長は、今の学生は「コミュニケーションはとりたいが自己表現方法が乏しい。腹痛の時『腹が痛い』だけ。どこがどう痛いのか説明できず、危機管理能力はゼロ。」(1996年5月11日日本教育新聞、「警告！大学生が危ない」より引用)と述べている。

このような状況であるからまして教室で授業中、自分の気持ち・考え・疑問を適正な音声できちんと文章で話したり、自発的に質問をする者は、大学生でも極めて限られてきている。この点に関して、米国のジャーナリスト、ラウチ Rauch, J. (1992) は「THE OUT-NATION」という本の中で、「わたしが訪れた日本の学校では、幼稚園から大学に至るまで、生徒が質問するところを一度として見なかった。」と述べている。

桜美林大学の荒木晶子助教授も「大学で授業をしていて思うのだが、何か学生に意見や質問を求めても学生が自発的に答えてくれることはあまりない。あてられれば答えはするが、その消え入るような小さな声とおびえたような、まるで自分が被害者でもあるかのような話し方は見ていて気の毒なほどである。」(1997年9月27日、日本教育新聞、「自己表現力を育てる 1」より引用) これでは、社会生活をスムーズにやっていくことも人間関係を深めることもできない。

筆者らはこの数年、ウイグルやトルコの子どもの

生活調査をしているが、そこで出会った子ども達は違っている。決しておしゃべりではないが、きちんと話ができるのである。例えば、ウイグルの子どもの場合、授業中、先生が質問すると小学生も中学生も背筋を伸ばし、黙って手を挙げ、指名されると立って、はっきりした発音できちんと自分の意見を言う。表現の形式も単語ではない。ある時、トルファンの小学校の5年生のクラスを予告なしに訪ねた。最初、訪問の趣旨と自己紹介をし、学校生活などについて質問してみた。相手は初対面で、しかも外国人である。それにもかかわらず子ども達は実に素直に次々と手を挙げ、答えてくれた。今度は逆に「何か尋ねたいことはないかな？」と質問を求めると、目を輝かせて色々な質問をしてきた。こうした、話すことへの積極的な態度と、適切な話し方は学校だけに限らない。町や村で会った子ども達も驚くほどフレンドリーな態度できちんと話ができるのである。この点に関して、落合信彦(1998)も中国・新疆のウイグル人の小学生達と話した時の経験を著書の中で「みな実にはきはきした言葉で答える。わからないなどと口をもぐもぐさせる子はひとりもない。」と感動的に述べている。

こうした日本の子ども達とは対照的に、トルコの子どもの達は一般に表情が豊かで、人と話すことに極めて積極的である。筆者らはこの数年、繰り返しトルコを訪問し、トルコの子どもの達の生活について調査を行ってきたが、この研究ノートでは、特に彼らのコミュニケーションに注目し、その実態と背景を説明する。なお、トルコ人はウイグル人とルーツを共有する民族だと言われている。

## 2. トルコという国について

- (1) 面積：780.576km<sup>2</sup> 日本の面積の約2.1倍。
- (2) 人口：6,784万人 (2000年)。
- (3) 住民：国民の7割以上がトルコ人である。他にクルド人がアナトリアの南東部に1,000万～1,500万人住んでいる。
- (4) 宗教：国民の98%がイスラム教を信仰している。但し、トルコは1928年以来政教分離の政策をとっている。イスラムというと、一夫多妻とか、黒い服で全身を覆った女性や禁酒を思い浮かべる人が多い。しかし、これは全く誤解であり、トルコは

わが国と同じ自由の国である。女性の権利も尊重されており、女性の国政参政権が認められたのも1934年でわが国より12年も早い。女性は社会の様々な領域で活躍している。

- (5) 政治：共和制、NATO 及び OECD の加盟国である。
- (6) 経済：国民一人あたりの GNP は、\$2,986 (2000年) である。
- (7) 教育：従来、義務教育は5年生までであったが、1998年から小・中一貫の8年制に移行した。子どもの数に対応する教室がなく、午前と午後の2部授業が行われている。1クラスの人数は原則は30人であるが、実際には50～60人程度。教室は狭く、子どもたちが長椅子に3人ずつ座っているところもある。なお、学校では、コミュニケーションの時間は特に設定されていない。

### 3. 調査の方法

- (1) 調査の対象：主として小学生と中学生。
- (2) データの収集法：学校での授業中の子ども達のコミュニケーションの様子を観察すると同時に、学校および学校外で子ども達にインタビューをすることにより収集した。なお、インタビューは、日本語に堪能な通訳を通して行われた。
- (3) 調査の地域：トルコ共和国のイスタンブール市内と市外、ブルサ市、イズニック市、トラブゾン市、サフランボル村、アンカラ市、アンタルヤ市、ヤロバ市、エディルネ市、ボドルム市など
- (4) 調査の時期：第1回1999年4～5月、第2回1999年8～9月、第3回2000年3～4月、第4回2000年12月～2001年1月、第5回2001年8月、第6回2002年3月、第7回2002年8～9月

### 4. 結果と考察

授業中、先生のコントロールがよくきいている。私語をしたり、勝手な行動をする子はまずいない。いても先生の一言で威儀を正す。背筋をきちんと伸ばして授業を聞いている。教師の質問に対してどの学校、どの学年でも子ども達は積極的に手を挙げ、自分の意見を皆に聞こえる声ではっきり述べている。だらけたり、ふざけた態度で、あるいは恥ずかしそうに小さな声で



写真1 日本について筆者（東）に質問する初等教育学校の6年生

発言する子は全く見られない。質問を求めると、切れ目がないほど様々な質問がでる。なお、子ども達は仲間の発言中は静かによく聞いている。他の子が発言しているにもかかわらず、「ハイ、ハイ、ハイ・・・」とせっかちに教師に指名を求めるような子は全くいない。

次の事例は、筆者らに対してなされたある小学校5年生のクラスの子供達の質問の内容である。

- 日本では学校へは何歳で行くんですか。
- 日本の学校は何年間ですか。
- 日本の学校ではテストがありますか。
- 日本では地震の時のために、学校ではどんなことをしていますか。
- イスタンブールはどんな印象ですか。
- 日本の子ども達はどんなジョークが好きですか。
- 箸を使って食べるのは難しくないですか。
- イスラムの国では、女の人は昔外出が難しかったけど、日本はどうですか。
- 日本では奥さんが働きたいと言ったら許すんですか。
- 日本では女の子のお祭りはありますか。
- 日本には子どものための公園がありますか。
- 日本ではトルコ語を勉強していますか。
- 日本ではドラッグをする人がいますか。
- 日本人はひまわりの種を食べますか。
- 子ども達は空手や柔道ができるんですか。
- トルコの学校と日本の学校はどんなところが違いますか。
- トルコには日本製の機械がいっぱいあります。日本人はなぜできるのですか。
- 広島原爆は人間や動物や植物にどんな影響を与え



ましたか。

- 先生と生徒の仲はどうですか？
- 日本の子ども達は学校に行くとき、準備を自分でしていますか？
- 日本の学校では制服はありますか？
- 日本の学校は午前と午後で分けていますか？
- 日本にはどんな果物がありますか？
- 広島は今どうなっていますか？
- どうして遠い日本から来て観光しないで、私達の学校に来たんですか。
- 日本の教育省は、学校嫌いの子どものためにどんなことをしていますか？

また、別の小学校の5年生のクラスでは、次のような質問がでた。

- あなた方のお仕事は何ですか。
- アタチュルクさんについて知っていますか。
- アタチュルクさんについてどう思いますか。
- 私達の学校についてどう思いましたか。
- あなた方に会ったトルコ人は親切でしたか。
- トルコの子どもの日についてどう思いますか。
- 日本にはどんな果物がありますか。
- 日本にはアイスクリームがありますか。
- 日本人達は広島に原子爆弾を落としたアメリカに今どんな気持ちをもっていますか。
- 日本では家族のためのお医者さんがいますか。
- 日本の子ども達は学校は好きですか。
- 昨日、CNNのニュースで日本の北の島(北海道)で噴火があったことがでてましたが、どんなぐあいですか。
- 中国に行ったことはありますか。中国の城壁を見たことがありますか。
- 日本で一番有名なところはどこですか？
- 日本では地震の時のためにビルの基礎に何かゴムのようなものを入れているのですか。

ここでは、子ども達の質問だけ紹介したが、こちらが問いかけたことに対しても子ども達は、どの子も躊躇することなく、皆に聞こえる適切な音声と、単語ではなくきちんと構造をもった文章で説明してくれた。

トルコの子ども達のコミュニケーション生活は、学

校で豊かであるだけではない。家庭や地域においても積極的で、彼らは友達や家族とはもちろん、異世代の人々や外国人とも相手の目を見て、自然な態度で会話をすることができる。例えば、このようなことがあった。ブルサでホテルからぶらっと出てきた筆者らを見て、路地で遊んでいた5、6人の子ども達が集まってきた。色々話しかけてきた。トルコ語が話せない筆者らには話がさっぱり通じない。すると、子ども達は「Hello! How are you?」「What's your name?」と学校で習った英語を使って問いかけてきた。筆者らはこれに対しては英語で答え、さらに「How old are you?」と問いかけたが、これは習ってないのか、誰も答えることができない。ちょっと戸惑っていたが、子ども達は何とかコミュニケーションをとりたいらしく、そのうち1人の男の子がたまたま飛んでいた空の鳥を指さして、「Bird! Bird!」、次には自分の黄色い服を指して「Yellow!」と言った。残念ながらこの時はいくつかの英単語のやりとりしかできなかったが、トルコの子ども達のコミュニケーションへの積極性はよくわかる体験であった。

また、こんなこともあった。地中海側の都市アンタルヤの郊外にあるベルゲの遺跡を訪れた折、ちょうど社会科見学に来ていた小学生の女の子が「ヤボン?」（日本人ですか）と話しかけてきた。そして、ベルゲの野原に咲いていた花を束ねて筆者（東）にくれた。また、地中海沿いの小さな町ケメル郊外の小学校で5年生の教室を訪問し、先生に乞われて日本について話をしたり、子ども達の質問に答えたりした。帰るとき、ある男の子が「色々興味深い話をありがとうございました



写真2 筆者（東）に片言の英語で話しかけてくる子ども達



写真3 「これをおばちゃんに記念にさしあげたいと思います。」

した。これをおばちゃんに記念にさしあげたいと思います。どうぞ受け取って下さい。」と自分がしていた指輪を筆者(東)にくれた(写真3)。この指輪は、親戚の人が聖地に巡礼に行った時の土産にもらった大切なものであった。

このようにトルコの子ども達のコミュニケーション能力が高い背景には、中近東や西アジア地方でよく見られるバザールの文化が関係しているように思われる。バザールというのは街頭の青空市場のことである。ここでは、売り手が行き来する人々に積極的に声をかけ、「店」に呼び込んだり、買い手と売り手の間で値段の交渉が活発に行われる。バザールの商品には、日本のように定価がついていない。お互い交渉し、折り合ったところで売買が成立するのである。コミュニケーション能力がなくては商売も買物もうまくできな。当然、こうした社会ではコミュニケーション能力は「生きる力」そのものということになる。

こうした文化のなかでは、当然、話すことに対する親の態度やしつけが重要になる。

実際、ヤマンラール水野美奈子(2000)によると、トルコ人は上手に会話ができるということは人として最も重要な教養の一つだと考えているという。雄弁こそ金なのである。したがって、親自身もコミュニケーションに積極的である。子どもはそれを観察し、コミュニケーションの仕方を学習する。また、トルコ人の親は日本人の親のように子どもの言葉を先取りしたり、抑制したりしない。むしろ子どもには色々な人と話す体験を積極的にさせるようにしている。幼い時からおじいちゃん、おばあちゃん、隣り近所の人など色々な



写真4 大きな声で皆の前で発表する小学校の1年生

人とふれ合い、話す場面がたくさんある。また、親も先生も子どもの言葉に耳を傾け、ゆったり受け止めてくれる。さらに、トルコの子ども達はよく手伝いをしている。そうした手伝い、例えばお使いの時には店の人と話したり、店の番をしている時にはお客さんと話す場面がいっぱいある。それは、コミュニケーションの実践体験そのものだと言ってよいであろう。なお、親、教師、老人など目上の人と話す場合の敬語について、子ども達は幼い時から家庭できちんと教えられているようである。

一方、日本には昔から「沈黙は金」「言わぬが花」「口は災いのもと」「もの言えは唇寒し秋の風」という言葉があるように、話すことを奨励しない文化がある。しかも、最近では様々な理由によりコミュニケーションのベースである人との関わりが希薄になってきているだけでなく、子どもの話す体験が大きく阻害されてきている。例えば、親は言葉についても非常に過保護・過干渉的で、子どもの言葉の先取りが日常的に行われている。「あなたは、こう言いたいよね」と子どもの言うべきことを先取りして言ったり、「ご飯!」と言っただけで要求に応じては子どもはそれ以上言わなくなってしまう。また、親による説明や指示が驚くほど多く、子ども自身が質問したり、意見を述べたりする機会はあまりない。

また、地域社会のなかでもボタンを押すだけでジュースや電車の切符が買える。バスも停車してくれる。スーパーではレジで黙って品物を差し出せば買物ができる。遊びも昔のように屋外で大きい子、小さい子が一緒になって遊ぶ集団遊びではなく、室内で一人

です。テレビゲームが主流になってきている。子ども達は今や地域の色々な人と関わり、話すということがなくなっているのである。

さらに、学校の授業方法にも大きな問題がある。意見を言ったり、質問をしたり、討論したりするコミュニケーション活動は、国語の授業だけでなく、本来、学校での様々な活動の中に含まれているはずである。ところが、日本の学校では伝統的に「知識注入・伝達講習会」型の授業が行われ、教師による説明や指示が多い。子どもたち自身が質問したり意見を述べる機会と体験は極めて少ない。質問をしたとしても正しい解答を求めるだけの場合が多く、欧米の授業のように「なぜか」と理由を問いかける場合は滅多にない。また、教師による子どもの「言葉の先取り」や、子どもの声が小さくよく聞き取れないものだったり、未熟な表現の場合、その意を汲んで教師が説明する「代弁行動」も頻繁になされている。このようにどの場面をとってみても話す機会が保障されず、話す体験を十分してい

ないわけであるから当然コミュニケーション能力は身につかないことになってしまう。

#### 引用文献

- 阿部茂明 1990 子どものからだの調査 '90の結果報告 正木健雄(編)「子どものからだは蝕まれている」 柏樹社
- 落合信彦 1998 「もうひとつのシルクロード」 小学館
- ヤマンラール・水野美奈子 2000 母親の力ーしつけー 鈴木重(編)「暮しがわかるアジア読本 トルコ」 河出書房新社
- ラウチ・ジョナサン 1992 近藤純夫(訳)「ジ・アウトネーション」 経済界

#### 参考文献

- 多田孝志 2000 「地球時代」の教育とは? 岩波書店

